

2025（令和7）年度 福岡女子大学 一般選抜個別学力検査

〔 前期日程試験問題 〕

国際教養学科

国 語

【 90 分 】

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから22ページにあります。問題は全部で**3題**です。
- 3 解答用紙には裏にも解答欄があります。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄**に**受験番号**を記入してください。
- 6 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください。**

問題一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

非合理性の問題は、結局は、個としての私たちの存在が、集団とどのような関係を築けるかにかかっている。非合理とは、個別性へ^①シユウチャクし、それを普遍の中に位置づけるのを拒否することだからである。もし私たちが完全に個人的な存在であつたなら、合理性とは自己の生命の維持に反しない有機体的秩序を意味するだろう。しかし人間は、自分の生命を維持する活動を超え出た活動を行い、そこに自分の人生の目的と価値を見出してしまふ。生命維持という生命的な合理性から見れば、非合理と呼んでよいことに価値を見出すことがある。対話的合理性も、その一種なのかもしれない。実際に、私たちは、共感や模倣を通じて、他者の視点を取得し、他者の視点とも矛盾しない合理性を作り出そうとするのである。あまつさえ、それが成長とさえ呼ばれるのである。

しかし、自己が、社会を含めた環境から分離したひとつの生命であることと、社会的な存在であることはしばしば矛盾する。自己の統合性としての理性の延長に、社会的な包括という別の理性をそのまま接続することは、あまりに予定調和的である。社会と個人のあいだには、いかんともし難い亀裂が存在することが忘れられるべきではない。ひとつの個体としての生き物であることと、対人関係の中でひとつの個人であること、そして社会の中でひとりの個人であることの三つはつきり区別されたほうがいい。そうでなければ、自己とは社会的存在であるというしばしば主張されがちな、しかし根本に邪惡^②を孕んでいる主張に加担することになる。人間の知性や認識の発達においてもこの観点は保持されるべきである。

では、個人の合理性と集団の合理性の間に穿たれた亀裂はどのように埋まるのだろうか。二つの合理性は、それぞれの観

点から見ればそれぞれ非合理に思われてしまう。個人の理性によって集団の理性が軽視されれば、自己中心性がオウコウし、対話は成り立たなくなる。逆に、集団の理性が個人を飲み込めば、合意の中に個人の存在が意義を失っていき、対話は不必要になる。この個と社会のあいだの大きな矛盾をどのように調停すればよいのだろうか。

二つの合理性をとりもつもの、二つの合理性の矛盾を橋架けるもの、それは感情である。理性の根底にある感情が二つを結びつけ、適切な関係を作り出す。個と集団を適切な関係に位置づけられるのは、感情なのである。以下に感情と理性の関係を見ていこう。

発達心理学によれば、知性の発達
は脱中心化にあるという。しかし、私たちはあらゆる観点を等しく並列させて、自分の特定の観点を相対化するわけではない。知性とは、抽象的な規則を獲得して個別に当てはめていく、コンピュータのような能力に尽きるのではない。リップマンの主張で見たように、思考力は感情と別物でなく、むしろ思考力の発達は感情的な人間関係の発達を基盤としている。感情の豊かな生物は、同時に知的に優れた生物である。知的発達が脱中心化にあるとしても、さまざまな他者のパースペクティブを自分のなかに取り込むためには、他者に一旦、共感しなければならぬ。自分の現在の視点やものの見方を他者の観点とすりあわせて総合していくには、他者との交流が必要である。そして他者と交流して、その視点を取得するには、感情的な絆を
B
その他者と取り結ぶ必要がある。そうして、私たちは、さまざまな他者に出会いながら、徐々に自分の認識を脱中心化していくのである。コンピュータソフトをインストールするように、突如、抽象的な規則からできた知性が獲得されるわけではない。人間の認識は人間関係を通して徐々に発達する。

そうした発達の過程は、繰り返すように、その人の感情的な人間的交流から区別されるものではない。特別の人間的交流

のあった人々の視点や考えが、相対化され得ない核として、その人の知性や認識にスエ^④られている。人生のそれぞれの段階で出会う人間の良し悪しを判断する基準として、たとえば、自分が育った家族の視点が、ある人にとっては重要かもしれない。その視点を相対化するような他の視点や知識が得られたとしても、その自分の家族のものの見方には、それが多少の偏りや歪みをもつていようと、その人にとって代えがたい重要さをもち、その人の人格の核の一部を構成しているかもしれない。この例がやや抽象的ならば、もつと感性に訴える味覚の例をあげるとよいかもしれない。私たちは、さまざまな美味しいプロの料理を食べるにつれ、自分の故郷の郷土料理が素朴で素人の味付けであることを知るだろう。しかし自分にとって故郷の味は、それでも自分のあらゆる味覚判断の基準になっている。

知的発達とは自分の位置が書き込まれていない地図を作り上げることではないだろう。私たちの知性には、個人の実存の刻印が押されており、そこには自分の個性と愛着とがその運動の道筋を作っている。合理性が、脱中心化し、抽象化した汎用プログラムを獲得することだとすれば、そこには感情と個性というエンジンが欠けていることになるだろう。

ただし、非合理的人は、今の自分の個性と愛着とを変えるつもりがまるでない。その意味で、自己が、頑なに、固く、硬直した状態になってしまっている。そこに失われているのは、感情の流動であり、愛と共感の動きであり、愛着の変容である。非合理性は、自分の感情の開放性や流動性を封じ込めようとする態度だからである。非合理性の問題は感情の問題である。それは、感情的な人間交流の範囲を狭く閉じ、その外の人間、新しい人間には感情を動かされまいとする不自然な態度である。逆に、合理性とは、開放的で、動きに満ちた感情に裏打ちされた能力である。もしかすると、それは、軽はずみなほどに共感力に優れた人間関係を基盤とした、いわば社交性に富んだ態度から生まれる理性なのかもしれない。あまりに

X 的であることは、浮気性の人に似た不信任を与えるかもしれない。

Y 的であることは、感情の流れに摩擦が

少ないということであり、逆に粘度の高い感情を持つ人は、排他的と呼ばれるのかもしれない。

従来の哲学や心理学では、感情と理性とは対立するものと考えられてきた。感情に溺れることは、理性的ではないことと思われてきた。しかし、これまで見てきたように、感情は知的発達の基盤である。理性とはさらさらした共感をもつということなのだ。

感情とは何であろうか。現代の哲学ではいくつかの特徴があげられている。喜、怒、哀、楽、愛、憎しみ、嫌悪、恐怖などの感情は、単一の感覚ではない。怒りという感情の中には、さまざまな感覚が含まれており、激情的な状態ばかりではない。静かだが、しかし深い怒りというものもありうる。失恋の悲しみには、万華鏡のように移ろいゆく一連の感じが含まれているはずである。また感情には、その人の信念や考えが含まれている。失礼な態度に怒りを感じるのは、その態度は失礼である、失礼とは人を侮辱する悪しき行為である、といった信念や考えが前提になっている。

感情は、嗜好や身体的欲求とは違い、認識によって制御することができる。イヌへの恐怖も、その動物の行動についての知識によって克服することができるだろう。先に論じたように、感情には良し悪しや利害に関わる価値判断が絡んでいる。喜びはその状況に対する肯定的な評価である。悲しみは否定的な評価を伴っている退却的な反応であり、怒りは否定的な評価を伴った攻撃的な反応である。感情とは、自己の快不快・利害に関係する状況に直面したことから生じる態度であるといつてよいだろう。感情が意図的・計画的な行動から区別されるのは、状況の中で反応的、すなわち受け身の状態から生まれるからである。

このように、感情は、合理性や知性と相反するものではない。しかし、なぜ、感情は理性と対立するものと考えられてきたのだろうか。それは、感情には個人の好悪や利害が関係しているからである。理性は、個人のレベルでは、感情という基盤に支えられているが、それが人間関係や社会の秩序であると認識されれば、個人という基盤を離れることになる。そうして、理性は、個人的である感情と対立するかのよう^cに思われる。しかし、感情は社会の中で共有されるものでもある。社会の中で不利になっている人々への共感が共有されることで、その人たちは社会的に包摂されるようになるであろう。犯罪に対する怒りが共有されれば、法律や政策に影響を与えるであろう。したがって、感情が理性と対立させられる場合とは、個人的利害と集団的利害とが不一致であるときである。

共感と愛は、人々を結びつける。嫌悪や憎悪、恐怖は、人々を分離する。対話的合理性に必要なのは、共感と愛だろう。しかしこれだけでは足りない。共感と愛は人を結びつけ、包摂しようとする。しかし、人は個として存在しており、対話によつてかりに合意が生まれても、その共通の価値や認識に還元されない差異にこそ、個人の個性が現れる。そこに、他の個とは異なる人格の独立性がある。人々を結びつけながら、個々人が集団から距離を取れる感情とは何であろうか。

それは笑いではないだろうか。笑いは複雑で表現に富んだ感情であり、定義することは難しい。しかし、笑ったことのない者はいないだろう。それは自分自身の場合も含めて、対象から距離を取り、自分と他者を分離し、あるいは見られる自分と見る自分を分離し、利害からも距離をとり、しかし緊張感から解放されることで生じる感情である。笑いは、この距離の感覚ゆえに、他の感情と異なり行動と直接結びつかない。それは、純粋な認識のような対象との関わりの薄さをもっている。

笑う人は状況に飲み込まれておらず、どこかで余裕がある。状況や対象に対して優越状態にあると言ってもよい。

対話的合理性に必要とされるのは、^D一方で人を結びつける共感と愛であり、他方で、笑いである。笑いは、人々の間で伝播し、共同性の感覚を喚起しながらも、怒りや悲しみや喜びのような湿度がない。笑いでは、個々の人間は切り離されて孤立である。悲しまない人がいたら不謹慎に思われる事態は存在しても、笑わない人がいたら許されない事態は存在しない。笑いは自由で、その人をシバ^⑤る規範性がない。

笑いは二重の感情、あるいは矛盾する感情の表現である。笑いは、ほほえみと異なり、喜びの単純な表現ではない。^⑥ムジヤキ[|]そうに、何でもよく笑う子どもの笑いの中にも、生き生きとした子どもの感受性の爆発の後ろに、大人と同じく冷静で対象を突き放した視線の萌芽^⑦を見出せるだろう。

シャルル・ボードレールは、笑いを二種類に分けている。ひとつは、「有意義的滑稽」であり、もうひとつは「絶対的滑稽」である。有意義的滑稽とは、対象を突き放しながら、自分は優位の立場に居続ける笑いである。人が失敗したのを見て笑う、人の弱さを見て笑う、不幸に見舞われたのを見て笑う。こうした笑いには、自分はその人の困難の外にいて、優位な位置から見下しながら距離をとる態度が含まれる。笑いがときに侮辱であり、不謹慎であるのはこのためだ。

これに対して絶対的滑稽はグロテスクを面前にしたときに生じる滑稽な感覚である。グロテスクとは、異様な対象や人物に対して、ある種の共感を覚えながら、同時に嫌悪感も覚えるような矛盾した感情が喚起されることである。グロテスクなものは、奇妙で、^⑧醜怪で、不調和、不気味でありながら、私たちの視線をくぎ付けにしてしまう。ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』に出てくる妙な生き物たちがそうである。ホラー映画でおなじみの怪物たち、ドラキュラ、フランケン

シユタイン、貞子もそうである。

絶対的滑稽とは、ボードレールによれば、真の笑いであり、無意味（ナンセンス）な笑い、はげしい哄笑である。そこには有意義的滑稽にみられる、傲慢やうぬぼれ、無粋さや下品さが無い。絶対的滑稽が、かりに笑う者の優位性を示しているとすれば、それは世界全体から距離をとれるという認識者の優位性である。それは、人間性が内包する根本的な矛盾や不合理を、そのままに肯定する態度であり、^⑨「無垢な生や絶対的な歓びに接近するところの遙かに多いもの」である。

であるとするなら、対話的合理性が生み出すものとは共感と笑いである。対話的合理性とは、自らを非合理と認める者が真理を望む態度である。合理性は閉じてしまえば、非合理となる。合理性は、自分を非合理と認めなければ非合理となる。人はさまざまな人への共感を通して理性を発展させる。しかし、これにはつねに限界があり、自らの合理性が非合理にとどまっていること、そして自らの合理性を信じれば信じるほど非合理が深まる。このパラドックスを前にした、あるいは、このパラドックスを自らに宿した人間に生じている感情とは、笑いなのである。ただし、それは絶対的滑稽からくる哄笑というよりは、対話の参加者と共に^⑩ドウビヨウ相哀れむといった体のユーモラスな笑いといった方が適切かもしれない。ユーモアとは、他者にも自分にも等しく距離を取り、その弱さや愚かさ、みじめさを笑い、それでもそうした人間の業^{ごう}とか性^{さが}とかをまるごと受け止め、肯定しようとする。ユーモアは、共感性と自己反省性に基づいた笑いである。それは有意義的滑稽や皮肉のように、自分を特別視した笑いとは異なる。共感とユーモアによって他者を迎え入れることのできる人間が、唯一、^E合理性の中にとどまることができるのである。

（河野哲也『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』による）

注 リップマン……哲学者（1923-2010）。子どものための哲学を創始し、「探求の共同体」という考えを提示した。
ボードレール……近代の詩人、美術評論家（1821-1867）。詩集に『悪の華』『パリの憂鬱』などがある。

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 傍線部A「この観点」とは、どのような観点をさすか、文中の言葉を用いて答えなさい。

問三 傍線部B「認識を脱中心化していく」とあるが、その際に、筆者は何をすることが必要だと考えているか、説明しなさい。

問四 文中の空欄 X、 Y には「合理」か「非合理」の語句が入る。あてはまる語句を、解答欄に記入しなさい。

問五 傍線部C「個人という基盤を離れることになる」とあるが、「個人という基盤」だけに基づく「合理性」にあたるものは何か。「合理性」で終わる十四字の語句を、本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問六 傍線部D「一方で人を結びつける共感と愛であり、他方で、笑いである」とあるが、ここで筆者は「笑い」がどのような働きをもつと考えているか、説明しなさい。

問七 ボードレールの「二種類」の「笑い」の違いを、筆者はどのように説明しているか、答えなさい。

問八 傍線部E「合理性の中にとどまることができる」ことについて、なぜ「ユーモア」が必要なのか、筆者の考えをわかりやすく説明しなさい。

問九 「余裕派」と呼ばれ、反自然主義的な作風で知られた作家を、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 島崎藤村 イ 夏目漱石 ウ 志賀直哉 エ 小林多喜二 オ 太宰治

問十 「対話」というテーマで、三百字以内で自由に論じなさい。

下書き用紙

[illegible]

問題二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(ただし、設問の都合上、送り仮名、返り点などを省いたところがある。)

景公築路寢之台、三年未息。又為長庌之役、二年未息。又為

鄒之長塗。晏子諫曰、百姓之力勤矣。公不_レ息乎。公曰、塗將成矣。

(1) 請成而息之。対曰、明君不_レ屈民財者、不_レ得其利。不_レ窮民力

者、不_レ得其樂。昔者楚靈王作頃宮、三年未息也。又為章華之台、

五年又_レ不息也。乾溪之役、八年、百姓之力不足而自息也。靈王死于乾

溪、而民不_レ与君_レ帰。今君不_レ遵明君之義、而循_レ靈王之跡。嬰懼

君有_レ暴民之行、而不_レ睹長庌之樂也。不_レ若息之。公曰、善。

非^{ザレ}夫子^ニ者、寡人不知得罪于百姓深也。于^レ是令^{シテ}勿^{ツムコト}委^レ壤、余財勿^{ムルコト}收^レ、

斬^{リテ}板而去^{ラシム}之^ヲ。

(『晏子春秋』による)

注 景公……齊の君主。 路寝之台……天子や諸侯たちが政治を行う正殿の楼台。

長庑之役……齊にある楼台の建設。 鄒……国名。 長塗……長い道路。 楚……国名。

頃宮……面積が一頃(一八二〇〇平方メートル)ある宮殿。 章華……楚の楼台の名。

乾溪之役……靈王が行った呉への出兵。乾溪はその宿营地の名。 嬰……齊の政治家、晏子の実名。

壤……道路工事の際の積み土。 財……資材。 板……路肩工事で積み土を固めるための板。

問一 二重傍線部(1)「請」(2)「于是」(3)「勿」の読みを、ひらがなで答えなさい。

問二 傍線部A「諫曰」とは、①誰を諫めているのか、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 景公 イ 晏子 ウ 百姓 エ 明君 オ 靈王

②また、どのような行いを諫めているのか、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部B「成而息之」について、「之」のさす内容がわかるように、現代語訳しなさい。

問四 傍線部C「対曰」の発言はどこまで続くか、発言の最後の漢字四文字(訓点や記号や句読点を除く)を答えなさい。

問五 傍線部D「民不与君帰」の「君」にあたるものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 景公 イ 晏子 ウ 百姓 エ 明君 オ 靈王

問六 次のうち、傍線部E「明君之義」にあたる行為として最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 築路寝之台 イ 為鄒之長塗 ウ 不窮民力 エ 作頃宮 オ 乾溪之役

問七 傍線部F「不若息之」について、「之」のさす内容を明らかにしながら、現代語訳しなさい。

問八 文中の「夫子」「寡人」にあたるものを、次のうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 景公 イ 晏子 ウ 百姓 エ 明君 オ 靈王

問九 ①傍線部G「不知得罪于百姓深也」を「つみをひやくせいにすることのふかきをしらざりしなり」と読むには、どの

ように返り点を付ければよいか。解答欄の白文に返り点を付けなさい。

②この「罪」について、発言者はどのようなことを罪と認めたのか、わかりやすく説明しなさい。

問十 本文の「令勿委壤、余財勿収、斬板而去之」という行為は、どのような結果となったことを表しているか、答えなさい。

問題三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

そのころ二条万里小路に左衛門尉^{さゑもんのかみ}とて、いやしき者あり。過去の戒行めでたきにや、富み榮へ一生を楽しめり。しかるに四十に余るまで跡をとふべき子もなし。夫婦ともにこのことを嘆き、鞍馬の大悲多聞^{おほいたもん}に数の宝を奉りて、男子にても女子にても、一人の子を授けてたびたまへと、一心に祈りければ、多聞天^{たもんてん}あはれとおぼしけるにや、宝珠を一つ袂^{たもと}に入れたまふとおぼしくて、はや例ならずおぼえければ、夫婦ともに所願成就しぬとて、御前^{まへ}を下向してけり。月日にわづらひなく十月に満ちぬれば、まことに玉を延べたるごとくなる女子を生めり。父母喜び、あまたの人をつけてかしづき育てけるに、この子十歳にて管弦の道をあきらめ、歌の道を極めぬること、たとへていはむ人もなし。

されば、聞き伝ふる人ごとに、心をかけずといふことなし。いまだをさをさしからねば、父母もいづれを夫^{つま}ともわきまへず、片時離れむことを悲しみけるが、この女十四の時、二条の関白殿に公卿、殿上人集まりたまひ、鞠会^{まりくわい}のありけるを、あたりの女房どもにいざなはれ、桜の木の下に衣引きかづきて、鞠を見るたれば、関白殿、遙^{はる}かにこれを御覧じて、気高き装ひに御心ひかれ、さだかなる顔ばせ見るよしもがなと、御心に念じおぼしめしけるが、うち現れたる気色もなし。人して、いかにと、のたまはむも、人目つましければ、御心にのみ思ひ入れたまふ。公卿、殿上人は、鞠に心の入りければ、さして見とがむる者もなかりけり。

かくて鞠も過ぎ、人々退散しけるに、関白殿は物見の窓より、かの女房の帰る姿を御覧するに、衣の裾をかいとり、袖うちかづきて歩みけるありさま、ただ天人の天下りたるかと、目もあやに見たまへども、いかにと留むる言の葉もなく、思ひ

乱れておはしけるが、左近將監さこんのしやうげんといふ者、折節御庭近くありけるを召して、あの白きかづきたる女房はいかなる者ぞ、尋ねて参れと仰せければ、左近將監かしこまりて車寄せまで走り出けるに、この女房ども、ここかしこにたたずみてありけるを、左近ちかく寄りて言ふやう、いかなる人なれば、これにはおはすらむと問ひければ、女いと恥づかしげにて立ち退かむとしけるを、いや、殿下(1)の仰せにて御行方を尋ね奉れとの御事なり。つつまず語らせたまへと言ひければ、女うち笑みて立ち帰り、みづから体のいやしき者を尋ねたまはむこと、思ひも寄らず。ただ人違へにてさぶらはむとて、走り出でむしたりければ、左近かしこく申しけるは、いづくまでも御跡に付きて、おはしまさむ所を見置きて帰らむと、続けて走りければ、ありかを見せてははづかしと思ひけむ、みづから行方は、高間たかまの山、とぞ申しける。

左近將監はたばかることとは知らで、高間の山とはいかにと、問い返さむも無下におぼえて、やがて立ち帰り、このよし、かくと申す。関白殿きこしめし、あら不思議や、高間の山と申すは葛城かづらきのことなり。これは天狗てんぐのすみかなれば、もし化生の者にてもありけむと、恐ろしくおぼしめし、思ひ捨てむとはしたまへども、ありし姿の身に添ふ心地して、つゆ忘れたまはねば、もしや高間の辺りにもありける人やと、隨身をつかはし、葛城の麓を尋ねさせたまへども、まことならぬことなれば、いよいよ御心乱れ、せむかたなくて、常は人知れず、夕べ夕べに内あたりを忍び歩き、かの者の行方をそこはかとなく求めたまへども、空行く雲をしるしに尋ね、立ち行く鳥の跡をとふごとく、思ひの床に臥し沈ふみたまふ。

人知れず思ひそめしことなれば、いかにと問ひ奉る人もなく、ただ御薬を与へ、大法などをとり行ひたまへども、あらぬ恋路の病なれば、さらにその験もなかりけり。ある日のつれづれに、勾当内侍こうとうのなましとてよろづ優しき上童うへわらはと、周防内侍すわののなましといふ歌の道達者たつしやなりし女房、二人参りて、殿下の御気色を見るに、さらにまことのわづらひならず。ひとへに思ひに沈ふみたま

ふと見えたり。誰に怖れてつつませたまふぞや、ありのままに語らせたまへと、慰め奉れば、殿下、御枕をそばだて、問ふにつらさのまさるぞや、今は何をかつつむべき。^⑤ いつぞや人々の鞠会のありし時、いづくとも知らぬ女房を一目見しより、心にかかる浮雲を、風の誘へることもやと、左近将監を出して行方を尋ねければ、いづくいかなる者とは言はで、高間の山とばかり言ひ捨てて、いづくともなく失せにし面影の、寝ては夢、さむれば現にも、つらき肌はだへの身に添ふ心地して、今百歳ももの命を捨てむことのあさましやと、涙を流したまへば、二人の女房うけたまはり、さてもあはれなる御物思ひのほどにてさぶらふぞや、いかさまこれはまことの高間の山にはあらじ、都のうちにこそあるべけれど、言ひければ、周防内侍しばらく思案して、高間の山と言ひ捨てたるは、古き歌の心なるべし、

よそにのみ見てややみなむ葛城の高間の山の峰の白雲^D

といふ本歌を取りて言ひしなり。この心をもつて、我を見て恋しとやおぼすらむ、峰の白雲のごとくにて、ありかを定めぬと言はむためなり。いかさま、世の常の人とおぼえず。女御、更衣の忍びて歩き、鞠を御覧ずらむと、言葉の末を感じければ、殿下きこしめして、さては E の道をもよく極めたる人なるかやと、いとど思ひのまさり、さてもよく思ひ寄り⁽³⁾て、我を慰むるうれしさよと、喜びたまひ、内侍に御引出物あまた下されけり。

『やむやき竹』による

注 二条万里小路……京の二条通りと万里小路の交わるあたりの場所。

過去……前世。

鞍馬の大悲多聞……鞍馬山の天台宗の寺院、鞍馬寺の、慈悲深い本尊の多聞天（毘沙門天）。

鞠会……蹴鞠けまりの会。

左近将監……左近衛府の第三等官。

高間の山……金剛山。現在の大阪府と奈良県の境に位置する。

葛城……葛城山。金剛山を含めた金剛山地の総称。

化生……神仏や化け物などがこの世に姿を現すこと。

大法……密教で最も重視される修法のこと。

上童……宮中の作法見習いのため昇殿を許され、貴人のそばで奉仕する若い女性。

問一

波線部①～⑤の語句について、本文に即した意味を現代語で答えなさい。

①かしづき

②あきらめ

③をさをさしからねば

④見るよしもがな

⑤何をかつつむべき

問二 文中の語句「殿上人」の読みを、ひらがなで書きなさい。

問三 点線部（あ）（お）の主語は誰か。あてはまる人物名を次のうちから一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号が重複してもよい。）

問四
ア 左衛門尉 イ 左衛門尉の女子 ウ 関白殿 エ 左近将監 オ 隨身 カ 勾当内侍 キ 周防内侍
二重傍線部（１）「殿下」、（２）「かの者」、（３）「我」は、誰のことか。あてはまる人物名を次のうちから一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号が重複してもよい。）

問五
ア 左衛門尉 イ 左衛門尉の女子 ウ 関白殿 エ 左近将監 オ 隨身 カ 勾当内侍 キ 周防内侍
傍線部Ａ「所願」とは、どのようなことか、本文の内容に即して答えなさい。

問六 傍線部Ｂ「ありかを見せてははづかしと思ひけむ」を現代語訳しなさい。

問七 傍線部Ｃ「空行く雲をしるしに尋ね、立ち行く鳥の跡をとふ」とは、誰の、どのような行為を表しているか、説明しなさい。

問八 傍線部Ｄ「見てややみなむ」の意味として、最もふさわしいものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見ないで済むのだろうか イ 見て終わってしまうのだろうか ウ 見るのを止めたいのだろうか
エ 見たら必ず会いたいのだろうか オ 闇の中でこそ見えたのだろうか

問九 この話における「高間の山」という発言は、①当初、どのような意味として受け取られたのか、

②最終的に、どのように理解されたのか、説明しなさい。

問十 文中の空欄 E にあてはまる語句を、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仏 イ 笛 ウ 鞠 エ 歌 オ 山 カ 車

問十一 周防内侍の「春の夜のゆめばかりなる」で始まる有名な和歌が『小倉百人一首』にとられている。この歌の始めの二句に続く、三句め以降を次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ながつきのありあけのつきをまちいでつるかな
イ よるさへやゆめのかよひぢひとめよくらむ
ウ おきのいしのひとこそしらねかわくまもなし
エ さむしろにころもかたしきひとりかもねむ
オ たまくらにかひなくたたむなこそをしけれ

問十二 文中の「よそにのみ」の歌は、『和漢朗詠集』や『新古今和歌集』に収載されている。次のうちから、『和漢朗詠集』以前に成立した作品の名を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 浜松中納言物語 イ 俊頼髓脳 ウ 後拾遺和歌集 エ 大鏡 オ 後撰和歌集